

エゴイズムのイデオロギー的特質(二)

——シュティルナアのエゴイズムとフォイエ
エルバッハのヒューマニズム——

富 沢 賢 治

「個人であるということとはもとよりたしかに『エゴイスト』であることである。しかし個人であるということとはまた同時に、しかもいやおうなしに、『コムニスト』であることである。」(L・フォイエエルバッハ)

(1) 前稿における目的は、エゴイズムの思想をM・シュティルナアに即して内在的に分析することによって、その論理を明らかにすることにあった。本稿における目的は、シュティルナアのエゴイズムをその対立思想としてのフォイエエルバッハのヒューマニズムと対比することによって、ヒューマニズムにたいするエゴイズムの思想的領域を明らかにすることにある。

(1) 『一橋論叢』五十四巻六号、所収。

(2) 本稿で分析する予定であったマルクスとエンゲルスとのシュティルナア批判は、紙数の関係で、次稿に譲る。

一 歴史創造の主体としての人間

思想史の基本的テーマの一つは歴史創造の主体をめぐる問題である。一般に、歴史創造の主体は、中世においては「神」、近代においては「人間」として、認識されるにいたった、と言われている。ドイツの場合、この思想史上の移行過程は、ルターからドイツ観念論哲学を経てフォイエエルバッハにいたるキリスト教の人間化の過程に特に顕著に見られる。ヘーゲルはこの過程の中間に位置する。彼が弁証法における運動主体として人間の抽象態としての「自己意識」を考えたとき、そこには神の立場と人間の立場との奇妙な折衷が見られた。絶対主義のイデオロクとしてのヘーゲルに見られるこの二面性を批判し、ドイツにおけるブルジョワジーの発展とともに、「人間」の立場を発展させていったのが、青年ヘーゲル学徒たちであった。(1)

(1) 富沢賢治「弁証法における主体の問題——初期マルクスのヘーゲル批判——」『一橋論叢』五十三巻六号、参照。

本稿の対象とする三人の思想家たちは、歴史創造の主体を「人間」と見る点では一致しながらも、その「人間」をどのようにに解釈するかという点で、相互に批判しあうことになる。

フォイエエルバッハは、人間を「類的存在」と規定し、実践的には「私」と「君」とを結びつける「愛」を基盤とした抽象的ヒューマニズムを説くことによって、イデオロギー的にはブルジョワジーの立場を反映することになる。

シュティルナアは、人間を「唯一者」としての「私^{イッ}」と規定し、実践的にはすべてのものにたいして「私」の唯一性を優先させる観念的エゴイズムを説くことによって、イデオロギー的

にはプチ・ブルジョワジーの立場を反映することになる。

マルクスは、人間を「社会的諸関係の総和」として、特にすぐれて階級的視点から、把握し、実践的には「階級闘争」を基盤とした人間解放を説くことによって、イデオロギー的にはプロレタリアートの立場を反映することになる。

彼らの相互批判のうちでシュティルナアのフオイエルバッハ批判については前稿において分析した。彼はフオイエルバッハの説く「人間」が抽象的存在でしかありえないことを批判し、現実的な運動主体は「私」であり、エゴイストこそが現実を動かす力である、と主張する。シュティルナアのこの批判にたいしてフオイエルバッハは翌年(一八四五年)ただちに反批判を加えている。以下はこの反批判の分析である。

(1) L. Feuerbach: Das Wesen des Christentums in Beziehung auf den „Einzigen und sein Eigentum“, In: *Wigands Vierteljahrsschrift*, Bd. II, 1845.

二 「全き人間」

「人間は人間の神である」というフオイエルバッハの命題における主語としての「人間」、これこそシュティルナアが觀念的存在として批判したものである。シュティルナアによれば、フオイエルバッハは、「類、人間、そのもの、理念」を人間の真の本質とし、「現実的個別的な私」を非本質的なものとすることによって、人間を本質的なものと非本質的なものとに分裂させてしまったのである。

このようなシュティルナアの批判にたいしてフオイエルバッハはおおよそ次のように答弁している。

「現実的個別的な私」を真に解放するためにこそ人間における個と類との区別は必要とされるのである。「人間の根本幻想、根本偏見、根本制限は主体としての神」である故、個人を解放するためには、まず宗教の秘密を暴露しなくてはならない。「私」と「人間における本質または本性」とを区別しないかぎり宗教の秘密は暴露されえない。個人の解放という目的のためには、まさに人間が自分の本質を神的威力として人間自身から区別するような心的状態を説明することをテーマの出发点として取りあげなければならない。この問題を考察したのが『キリスト教の本質』である。それ故、「近世のスローガンである人格性、個性が無意味な美麗句であることをやめてしまった唯一の書物はまさにキリスト教の本質である。なぜかといえ、ただ神の否定だけが……個体の肯定であり、且つただ感性だけが個性にビッタリとした感覚だからである。」⁽²⁾

(1) L. Feuerbachs *Sämtliche Werke*, hrsg. von W. Bolin und F. Jodl, Bd. VII, Stuttgart 1903, S. 296. 船

山信一訳『唯一者とその所有』に対する関係におけるキリスト教の本質(『キリスト教の本質』下巻、岩波書店、一九六五年、に所収)三四九頁。

(2) *ibid.*, S. 298 f. 邦訳、同上書、三五三頁。

(3) *ibid.*, S. 298. 邦訳、同上書、三五二頁。

かくしてフオイエルバッハは、『キリスト教の本質』のテ

マが、シュティルナアの批判するものとは異なり、かえって「本質的な私と非本質的な私との分裂の廃棄であり、頭からかかとまで全き人間の神化すなわち肯定、承認である」ことを強調するのである。

(1) *ibid.*, S. 297. 邦訳、同上書、三五二頁。

フォイエルバッハのいう「全き人間」(der ganze Mensch)とはなにか。この問題を説明するためには、フォイエルバッハが人間における個と類との関係をどのように把握していたかをまず明らかにしなくてはならない。

三 「個人」

フォイエルバッハもまたシュティルナアと同様に、「個人が絶対的な、すなわち真の、現実的な存在者である」ことを認める。しかしながら、シュティルナアが個人の「唯一性」を強調するのにたいして、フォイエルバッハは個人の「他の諸個人との同一性」(Identität mit den anderen Individuen)を強調する。彼はシュティルナアの「唯一者」をおよそ次のように批判している。

(1) *ibid.*, S. 299. 邦訳、同上書、三五三頁。

(2) *ibid.*, S. 300. 邦訳、同上書、三五四頁。

「唯一者」の場合におけるように、もし「個体」が「この排他的な個体」を意味するとすれば、それは「宗教の立場」に再びおちいることになる。「個体の神性が宗教における解決された秘密」である。宗教の本質は、宗教が或る種属または或る類

から「唯一の個体」をえらび出し、そしてそれを神聖不可侵なものとしてその他の個体に対立させることのなかに成立している。「それ故、宗教を廃棄するということは、その宗教が持っている神聖化された対象または個体と、それと同一な類に属する他の世俗的な個体との同一性を証明すること以外の何物をも意味しない。」

(1) *ibid.*, S. 297. 邦訳、同上書、三五二頁。

(2) *ibid.*, S. 299. 邦訳、同上書、三五四頁。

このようにフォイエルバッハは、シュティルナアこそ宗教の立場におちいつているとして、「『エゴイズム』の絶対的觀念論」を批判するのである。ではフォイエルバッハは個体と他の諸個体との同一性をどのように証明しようとするのであろうか。彼は次のような説明をしている。

(1) *ibid.*, S. 295. 邦訳、同上書、三四七頁。

「君はただこの比較することができない個体をその超自然主義的なエゴイズムのまやかかしから世俗的な感性的直観へ移しさえすればよい。」「感覚にしたがえ！ 感覚が始まるころでは宗教がなくなり哲学がなくなる。しかし君はその代りに平明ではだかのままの真理を得るのである。」「世俗的な感性的直観」は君に諸個体の個別的な区別と同時にその個体と他の個体との同一性を思い浮かべさせる。感覚にしたがうならば、君は男性か女性かである。そして男性は女性と、女性は男性と比較される。シュティルナアが主張する「唯一の比較することができない私」したがってまた「セックスなしの私」は「古いキリスト

教的超自然主義の消化されない残滓」にすぎない。⁽⁸⁾君が思想のなかで君の感性的男性存在から引き離す「私」は抽象の産物であり、その實在性という点においてはプラトンのイデアと同様である。男性としての君は君自身を必然的に他の存在である女性に關係させる。

(1) *ibid.*, S. 300. 邦訳、同上書、三五四頁。

(2) *ibid.*, S. 300. 邦訳、同上書、三五五頁。

(3) *ibid.*, S. 301. 邦訳、同上書、三五六頁。

このようにフォイエルバッハは個人の独自性を認めつつも同時に個人の他の個人との同一性を特に強調する。この同一性がいかなるものであるかをさらに究明するためにはフォイエルバッハにおける「類」概念が検討されなくてはならない。

四 「類」

「類」としての人間は抽象的存在でしかありえないとするシュティルナフの批判にもかかわらず、フォイエルバッハは「類」としての人間もまた現実的存在であると主張する。彼は「類」を一定の個人において表象される主観的な意味での「類」と客観的存在としての「類」そのものの二つに区分して、前者を抽象体と認めつつも、後者を具体的存在であると主張する。この点にかんして彼は次のように説明している。

「相対的には、すなわちこの人間としての私にとつては、たしかに……類は単に抽象体にすぎず単に思想にすぎない。……例えば過去の人間は、たといそれ自身においてはかつて現実的

な感性的な存在者であつたにしても、私にとつては単に思想上の存在者または表象上の存在者にすぎない。⁽¹⁾しかしながら、類はそれ自身においては感性的実存を持っている。「類」とは抽象体を意味しないで、もっぱら個々の独立的に固定した私にたいして君 (*das Du*) すなわち他者——一般に私の外に実存する人間的諸個体——を意味するのである。⁽²⁾」

(1) *ibid.*, SS. 302 f. 邦訳、同上書、三五八頁。

(2) *ibid.*, S. 302. 邦訳、同上書、三五八頁。

では、「個人」と「類」との相違はどこにあるのか。フォイエルバッハによれば、両者は、「個人は制限されており、類は制限されていない⁽¹⁾」という点で異なる。しかしながらだからといって「この個人の制限はまた他の諸個人の制限であるわけではなく、現在の人間の制限はそれだからといってなお将来の人間の制限であるわけではない⁽²⁾」。だが個人は自己を感性的にも道徳的にも制限された存在として感ずる。個人をこの制限感から救い出すのが、主観的には「制限されない類の想念」(他の人間、他の場所、幸福な他の時間の想念など)であり、客観的には「私に欠けているものを与えてくれる他人」(男にとつての女、女にとつての男、盲人にとつての案内者など)すなわち「私の『も、一人の私』」(*mein „anderes Ich“*)である。⁽³⁾こうして人間は人間の神である！そして君はただこの人間的な神によってのみ非人間的で人間の外部にいる神を余分なものにすることができるのである。⁽⁴⁾それ故、類を認めない人は、必然的に再び神の表象によってみだされるすきまを個人のなかに

認めることになる。「ただ類だけが、神性や宗教を廃棄し、且つ神性や宗教の代りになることができるのである。」

(1) *ibid.*, S. 302. 邦訳、同上書、三五八頁。

(2) *ibid.*, S. 302. 邦訳、同上書、三五八頁。

(3) *ibid.*, S. 304. 邦訳、同上書、三六〇頁。

(4) *ibid.*, S. 304. 邦訳、同上書、三六〇—一頁。

(5) *ibid.*, S. 303. 邦訳、同上書、三五九頁。

「私は自己をなにもにも依存させない」というのがシュテイルナフのモットーであった。これにたいするフォイエルバッハのモットーはこうである。「私は君なしには存在しない。私は君に依存している。君がなければ私もない。」これは愛の告白である。「愛」がフォイエルバッハの実践原理となる。

(1) *ibid.*, S. 303. 邦訳、同上書、三五九頁。

五 「愛」

シュテイルナフはフォイエルバッハが信仰から愛へ逃避しているとは非難する。だがフォイエルバッハによれば信仰から愛への移行は逃避ではなく、積極的な無神論的行為なのである。

「愛以外には、神の国から人間の国への実践的有機的な……移行はない。なぜならば愛は実践的無神論であり、心や心情や行為のなかで神を否定するものであるからである。」愛は他のあらゆる個体を排除してこの唯一の個体に立ち止まるということをしなない。「一つのものを欲するののもっぱらエゴイズムであるが、しかし多くのものを欲するのは愛である。」愛は、唯

一性および比較することができないということを否定する。かくしてフォイエルバッハにしたがえば、「自己」をこの唯一の比較することができない個人に制限しないで、自分の思想および心情を類すなわち他の諸個人にひろげるといふ抽象⁽⁸⁾は積極的な意味を持つことになる。

(1) *ibid.*, S. 307. 邦訳、同上書、三六五頁。

(2) *ibid.*, S. 302. 邦訳、同上書、三五七頁。

(3) *ibid.*, S. 302. 邦訳、同上書、三五七頁。

ではフォイエルバッハの意味する愛はいかなる愛か。彼が「エゴイスティックな愛」あるいは「自己愛」(*Selbstliebe*)であることは認めるが、しかし「我欲的利己的な愛」(*selbst-süchtige, eigenützige Liebe*)であることを否定する。フォイエルバッハによれば、人はただ自己を満足させ幸福にするものだけを愛することができる故に、あらゆる愛はその限りエゴイスティックなものである。しかしそれにもかかわらず「我欲的利己的な愛」と「非利己的な愛」(*uneigenützige Liebe*)との間には区別がある。フォイエルバッハのあげている例を用するならば、前者の対象は娼婦であるが、後者の対象は愛人である。両者は同時に人を満足させるが、しかし前者においては人は本質を部分に従属させるのにたいし、後者においては部分を全体、本質に従属させる。前者においては人はただ彼の一部分を満足させるにすぎないが、後者においては彼自身を、彼の完全な全体的本質を、満足させる。前者においては人は高いものを低いもののために犠牲に供し、したがって高い享受を低

い享受のために犠牲に供するのである。

かくしてフオイエルバッハは、実践原理を信仰から愛に移し、「エゴイステイックな愛」あるいは「自己愛」を認めつつ、「非利己的な愛」を彼の倫理学の基礎にする。このような性格を持った彼の倫理学がシュティルナフによって批判されるのである。

六 宗教と倫理

「フオイエルバッハはまさに宗教を倫理学にし、倫理学を宗教にしている」とシュティルナフは批判する。この批判にたいしてフオイエルバッハは、まず宗教を倫理学にしたという点については、彼が「キリスト教を根底として」且つまた「キリスト教に対立して」宗教を倫理学にした、と述べている。彼によれば、キリスト教においては人間相互の関係を対象とする倫理学は神と人間との関係にたいして従属的な地位を占めているにすぎない。このようなキリスト教に対立して、「人間を道德の上に置く」こと、「道德を人間の尺度にするのではなくて、逆に人間を道德の尺度にする」ことが必要である、とフオイエルバッハは主張するのである。

(1) *ibid.*, S. 309. 邦訳、同上書、三六七頁。

では、人間はどのようにして道德の尺度となりうるのか。フオイエルバッハによれば、「人間の本质はそれ自身においては非道德的存在でもなければ道德的存在でもない」故に、「人間に適合しておりふさわしいものが善いものであり、人間に矛盾

するものは悪いものであり非難されるべきものである。」⁽¹⁾

(1) *ibid.*, S. 309. 邦訳、同上書、三六七頁。

したがってフオイエルバッハによれば、倫理的関係はそれ自体で神聖なものではなく、それが人間の本质の自己肯定、自己満足であるから、またその限りで、神聖であるにすぎない、ということになる。それ故、彼が倫理学を宗教にしている、というシュティルナフの批判にたいして、フオイエルバッハは次のように答えている。「倫理学を宗教にするのは……道德的存在すなわち道德の本质が宗教的すなわち最高の存在だからではなくて、現実的感性的個別的人間の存在が宗教的すなわち最高の存在だからである。」

(1) *ibid.*, S. 309. 邦訳、同上書、三六七頁。

このようなフオイエルバッハの倫理学にたいしてシュティルナフは特にその観念論的性格を批判して、「フオイエルバッハは自分の唯物論を観念論の財産で覆っている」と述べている。ところがフオイエルバッハはこれを根拠がない主張として退けている。彼は、精神も物質も抽象にすぎず、現実的なものはただ感性 (*Empfindlichkeit*) だけである、と述べて、彼が観念論者でも唯物論者でもないことを強調する。彼は次のように自己を規定して彼のシュティルナフ批判を終えている。「さてフオイエルバッハはいったい何者であるのか? フオイエルバッハは、思想の上では彼が実際にあるところのもの、精神においては彼が肉体においてあるところのもの、本質においては彼が感官においてあるところのもの——すなわち人間なのである。あるい

はむしろフォイエルバッハは、彼が人間の本質をもつばら共同体 (Gemeinschaft) のなかに認めるが故に、共同人 (Gemeinmensch) であり、¹⁾「コムニストなのである。」

(1) *ibid.*, S. 310. 邦訳、同上書、三六九頁。

七 「エゴイスト」と「コムニスト」

以上の分析から明らかなように、シュテイルナアが個人の「唯一性」を強調するのにたいし、フォイエルバッハは人間の「同一性」を強調している。そこには人間の平等をうたったフランス人権宣言のドイツ的形態がみられる。シュテイルナアの思想が独自性を商品としているブチ・ブル・インテリの立場を反映しているとするならば、フォイエルバッハの思想には市民

あるいはブルジョワジーの立場が反映されている、と言える。個人を「エゴイスト」であると同時に「コムニスト」であると把握したところにフォイエルバッハの思想の特徴がみられる。しかし同時に、「コムニスト」を「共同人」としてしか把握しえなかったところにイデオロギーとしてのフォイエルバッハの思想の限界がみられる、とも言えよう。この点の確認は別稿を必要とする。

エゴイズムとヒューマニズムとがマルキシズムのうちにいかに揚棄されるのかという問題については次稿において分析する予定である。

(一橋大学大学院元学生)